

ある日の育児日記から

(82)

佐藤 和代



ある日の夕方、仕事から返り、ほっとしてコーヒーを飲みはじめたときです。自分の部屋から出てきた妻が「あれ、有は？」と言いました。「え、お父さんが迎えに：」「オレは行ってないぞ！」一瞬、夫婦で凍りついた。まだ保育園にいるんだ！ 時計を見ると、六時五分前。きゃー、あと五分だ、タクシー呼んでも間にあわない！ とにかく園に少し遅れると伝え、近所の、車で通園している子の家に電話。こういうとき保育園仲間は頼りになります。事情はあとで！ とばかり、すぐ車を出し、裏道をとばしてくれました。

園に着いたら六時五分。有は「おそいよー」と言いつつ、笑顔で走ってきました。よかった、何とかセーフ。それにしても冷や汗かいたな。パチンコに熱中して子どもを置き去り、なんてニュースがあったけど、そういう親を責められないわ。あのまま夜まで忘れていたらどうなったでしょう。…という話をしたら、あるお母さんが言いました。「乳児クラスの頃、夜中にふっと目がさめて、あっしまった、今日は子どもの迎えに行っていない！！ って気づくの。ドキドキして、で、本当に目がさめるのよね。あれが一番こわい夢だったわ」ほんと、それはこわい…。

